

人と人がつなぐ知識や技術

— 西アフリカ半乾燥地での活動から —

1991年に青年海外協力隊員としてセネガルに、1996年から日本のNGOの一員としてブルキナファソに、そして、2010年から国際協力機構（JICA）の草の根技術協力事業のためニジェールで活動しました。日本にいた時期も含まれますが、22年間、西アフリカの半乾燥地域に関わってきました。その経験を振り返りつつ、アフリカとの関わりを手探りする自身の想いを紹介します。

24

はじめてのアフリカで学んだこと

セネガルは、私がアフリカで活動した最初の国でした。島国のカーボベルデを除くと、アフリカ大陸の最西端にあたります。私の赴任地は、モーリタニアとセネガルの国境を流れるセネガル川の支流に位置するギエル湖の南の村落でした。ここでは、雨季にはトウジンビエやササゲ、落花生などの栽培、乾季には湖の水を引いた農耕地でトマトやタマネギなどの野菜の栽培が行われていました。かつては、乾季に入り湖の水が引いて現れる湿った土地で、カボチャ、スイカ、メロンなどのウリ科の作物やキャッサバが

栽培されていました。今は、首都ダカールの水道水を確保するため、ギエル湖の上流部と下流部に堰が築かれ、季節的な水位の変動が少なくなったせいか、ウリ科作物やキャッサバの栽培はあまり見られなくなりました。この土地で興味を引かれたのが、土の耕し方でした。

水が引いて現れた土地の表面が乾きはじめると、木でできた長い柄の先端に半円形（あるいは三日月形、三角形）のブレードを付けた「手押し鋤^{すき}」と呼ばれる伝統的な農具を使い、土壌の表層数cmをひっくり返して種をまきます。日本の大学で農学を学んだ私は、鋤^{くわ}を使ってもう少し深く土を耕せばいいのと思いました。ところが、実際には、土壌の表層をひっくり返すことで、水分の蒸発を防ぎ、塩類集積を抑制する効果があることがわかりました。そして何よりも、鋤で土を耕すよりも、手押し鋤を使う方がはるかに楽なのです。そこで行われていることを、その土地の文脈から捉え理解することの大切さを学びました。

家畜がけん引する荷車をめぐって

西アフリカでは、荷物の運搬や人の移動手段として、家畜が引く荷車を見かけます。セネガルでは馬かロバ、ブルキナファソやニジェールでは牛かロバなど、地域によって異なる家畜が

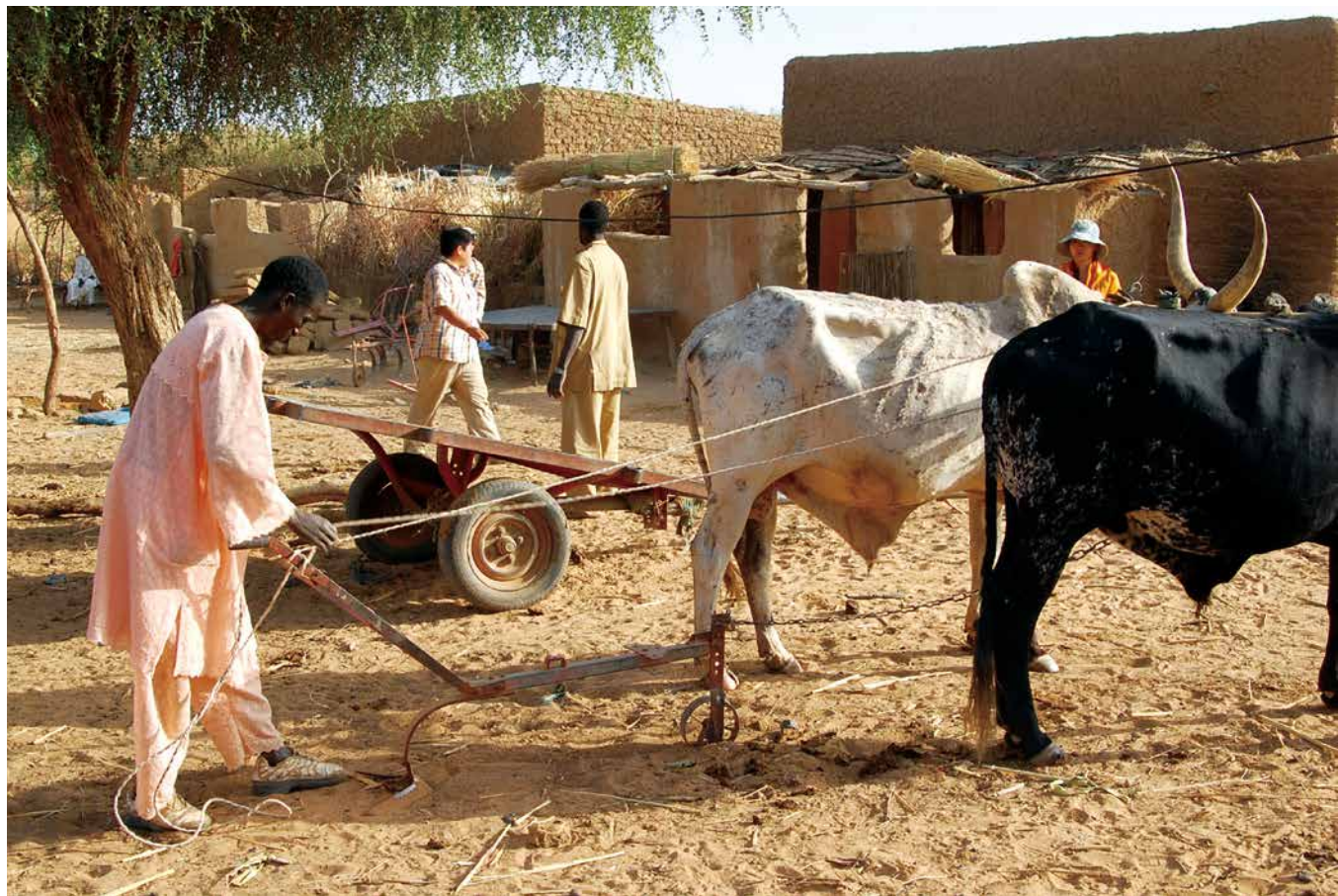
使われます。

荷車を引く家畜の違いは、それぞれの地域の歴史や土地の条件などの違いに見ることができます。馬について見てみましょう。セネガルは、フランス領西アフリカの首都がおかれたところで、街の道路は古くから舗装され、ヨーロッパの影響を色濃く受けていたためか、ヒトや荷物を運搬する車両を馬が引いていました。ブルキナファソでは、乗馬のためだけに使用してきたためか、馬に荷車を引かせる姿を見ることはあ

りません。ウシについて、見てみましょう。ブルキナファソ北東部の農村では、1980年代の大干ばつの後、ヨーロッパからの地域開発支援の一環として、家畜がけん引する荷車が、村に1台ずつ導入されました。当初は使い方がわからず、人間が先頭に立ってウシと荷車を引いていたそうです。今では、人間が荷車に乗って、そこから家畜を操るのが普通になっています。荷車を引く家畜の種類は、その土地の条件にも関係します。ニジェールやブルキナファソでは、



写真①村人たちと意見交換している様子



写真②ウシと犁

速度は出ないものの、砂地でも荷車を引けるウシやラクダが使われます。ロバの利用も一般的で、扱いが比較的容易なのか、子どもが上手に荷車を操っているのを見ることができます。

家畜が荷車を引く光景は、西アフリカの各地で日常的に見られるものですが、長い歴史のなかではここ100年くらいの新しいものです。もともと、外から持ち込まれたものですが、それぞれの地域の民族や暮らし、生態環境を反映しながら今の形に落ち着いたように思います。

ブルキナファソでの砂漠化対処の取り組み

ブルキナファソの北東部の村で、日本の環境省が進める「砂漠化対処のための技術移転事業」に関わったことがあります。そこでは、村人の意向を丁寧に確認しながら(写真①)、「荒廃地を回復する技術」^{すき}、「家畜がけん引する犁」による耕起技術、「裁縫技術」、「せっけん作り」に組み込みました。後ろの2つは、砂漠化対処に関係がないように見えますが、砂漠化問題の本質は、土地の荒廃と貧困が連鎖することですので、人びとの生計向上に役に立つ活動もそれに含まれると考えました。ここでは、「家畜がけん引する犁による耕起技術」の話を紹介합니다。少し言葉が長いので、以下、「畜耕」^{ちくこう}と呼ぶことにします。ここでの畜耕は、農作業の効率化や劣化

しあまり使われなくなった土地を利用することにより作物の収量を増やし、それにより現行の農耕地への利用圧力を軽減することで間接的に砂漠化の進行を抑えようとする取り組みでした。ウシ2頭が金属製の犁を引き、深さ10cm程度の土壌を反転させます(写真②)。畜耕の取り組みに参加した村人たちは、主食となるトウジンビエが作付される砂の多い柔らかい土壌がある土地と、季節河川(雨季にだけ水が流れ、乾季には涸れている川)に近く粘土が多く含まれる固い土壌がある土地の2カ所で試験をしました。前者の砂の多い土地では、畜耕を始めてからたった1年で土壌が疲れてしまうことに気が付きました。後者の土地は、劣化により雨水が土壌に浸み込みにくくなり、かつ土壌が固く鋤を使つての人力による作業が大変なため、あまり利用されなくなりましたが、畜耕により簡単に迅速に耕せることに気が付きました。そこでは、モロコシという作物を栽培します。固い土さえ柔らかくできれば水が浸み込み、季節河川に近い土地ですので、水分や養分が多く、モロコシの生育は旺盛で予想以上の収穫が得られました。また、モロコシの穂や稈を収穫した後に、株元から孫生^{ヒコバエ}と呼ばれる新しい稈や葉が伸び、時には1mにも達することがわかりました(写真③、④)。これは、乾季に入っても土壌中に水分が残っていて、モロコシが生育を止めないため



写真③刈り取ったモロコシの株元から新しい穂や葉が出てくる

28



写真④乾季に入ってから新鮮な飼料は嬉しい

す。ウシやロバ、ヤギ、ヒツジにとっては、嬉しい新鮮な飼料となります。

畜耕をめぐっては、面白い話がありました。季節河川沿いの土地で畜耕を行なっているAさん（30歳前）は、私たちが事業をする以前から畜耕を知っていました。約30年前に村を訪れたピエールさんというフランス人が、家畜がけん引する荷車と犁を紹介したそうです。多くの村人は、犁を手に入れることができなかつたため畜耕が村に広く定着することはありませんでした。その中で、既に亡くなったとある村人がこのフランス人から畜耕技術を受け継ぎ、細々ながら実践していたというのです。Aさん自身も、その様子を見ていましたが、畜耕にはあまり関心がありませんでした。ある日、村から10kmほどの距離にあるニジュール領内の村を訪れたとき、そこの村人が畜耕をしている光景に出くわし、少し興味を引かれるようになりました。また、マリから村の金鉱に出稼ぎに来ていた人が、Aさんの畑で半日程度の技術指導をしてくれたのがきっかけとなり、畜耕によるモロコン作をするようになりました。そこに日本から来た私たちが、畜耕を紹介したので、自分の取り組みが間違っていないと感じたそうです。Aさんが子どもの頃に聞いたフランス人のこと、不思議に思いながら眺めた畜耕を細々と行っていた村人の姿、ニジュールの村で出会った畜耕

する村人、マリからの出稼ぎ者からの手ほどき、そして日本からきた私たちとの出会い。およそ30年をかけて、いろいろな人びとが出会い、ある取り組みが細い糸のようにつながり、また、ある日突然多くの人びとが集ったりしたのです。

いまでも学びの途上

さまざまな活動を終えて日本に戻り、しばらく経ちます。ここ数年、治安が悪化したため、これらの活動がどうなったのかを確認するために現地を訪れることもかありません。いま振り返ると、もっと良い判断で現地と関わる選択があったのではと考えることがあります。西アフリカでのこれまでの経験を踏まえて、外部者である私たちの方からも、幾つかの技術や活動の提案ができたかも知れません。また、取り組みに参加した人びととの意思疎通と共通理解がどの程度できていたのかも確信が持てないでいます。そのなかで、ひとつ強く確信できることがあります。それは、知識や技術が伝わるのは、人と人の出会いや学び合いを通じてということです。

その思いとともに、これからも、アフリカの人びとの「いま」に関わり、これからの暮らしに想いを馳せたいと考えています。

瀬戸 進一